

五郎にせよ、一生を役者といふものに浸し切つてゐる姿、役者以外には取り得のない役者になるために生れてきた役者、それが僕にはたまらなく、うらやましい感があるのだ。

新劇にも、こゝろいふ役者らしい役者の芽生えが、もうぼつぼつ生れてきていゝのではあるまいか。役者馬鹿と言はれるような役者が出はじめていゝのではないだらうか、新劇の面白さといふことも、つまるところは役者の面白さといふことなのである。脚本や、演出や装置が、役者の面白さの以前に問題になつてゐる間は、新劇は決して面白くはならぬいだらう。僕らが新劇の眞の傳統を創るといふことを自負するならば、なにはともあれ、役者がうまくなることゝが絶対に必要であらう。まづ理論より實際である。(俳優座)

## 悩みと夢

野澤喜左衛門



藝人の

へーじ



一ヶ月に三味線のバチが三本も擦り減るなどといへば、「そんな阿呆なことが……」とお笑になるかもしれないが、何分にもたゞきつける様にして弾くのですから、十日に一本の割で擦り減ります。

ところがこの擦の修理に使ふ象牙がありません。象牙どころか三味線の生命とも云うべき糸がありません。さらにその上、困つたことは文樂の三味線には後継者がありません。どれほど三味線があり、撥が何十本あつたとて肝心の弾き手がなければ文樂ももう終りです。昭和十六年からこちらへ、太夫への弟子入りはあつても、三味線への弟子入りは一人もありません。

どの藝ごとでも同じですが、文樂の三味線でも小さな時分からの修業をやましく云はれます。わたくしも十三の歳からこの道にたづさはりましたが、その時でさへも「もう十三歳では遅い」などと云はれた位でした。歳がいつてくると關節が固くなつて、手の自由がさかなくなつてくるからです。それが最近の様に學校の様子が變り、世の中が選つてき

ますと、いよゝ弟子入りが困難になるわけです。

三味線弾きはどこまでも女房役で、太夫の様に表示つて派手なところが無いのが、本當の三味線ひきの姿なのです。太夫の長所は大いにひきたて、逆に短所は出来るだけこれをつゝみ隠すやうにするのが三味線弾きです。太夫がお客さまから、褒められれば、それが即ち三味線弾きがほめられたことになるのです。

これはまた決して舞台の上だけでなく、すべてに女房らしい内助の功が要る。その上後輩の太夫のよき指導者として、よい母でなければならぬ。

今日、時代が新しくなつて色々變つた傾向が見られる様になりましたが、わたくしもまた一つの夢をもつてをります。それは文樂の三味線から飛躍して、太棹に器樂としての獨立性を持たしてみたいことです。そして今、わたくしはこの「夢」に藝道のすべてを賭けてをります。(文樂座)